HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	スロバキア内務省第14 局長アントン・ヴァシェックと強制移送にたいするその責任……ヴァンダ・ラジカン
著者	木村，和範；KIMURA，Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集，71(1)：39-55
発行日	2023-06-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《翻訳》

スロバキア内務省第14局長アントン・ヴァシェックと強制移送にたいするその責任*

ヴァンダ・ラジカン**
木　村　和　範***（訳）

アントン・ヴァシェック（Anton Vašek）は，1905年4月29日，セネツ［ブラチスラバの東約25キロメートル］近郊のフルバ・ボルシャで生まれた。法学の学位を取得後，ブラチスラバで公務員になって情報誌を編纂した。1927年，スロバキア地方自治体連合会（National Association of Slovak Villages, Towns and Districts）の事務局長に就任し，1930年から1938年までは『ブラチスラバ市広報（*Správy mesta Bratislavy*［The Bratislava City News］）』と『スロバキア自治政府の声（*Hlas slovenskej samosprávy*［Voice of Slovak Self-government］）』紙の主筆を務めた[訳注1]。1942年4月3日，ヴァシェックはスロバキア・ユダヤ人局［内務省第14局］の局長となり，内務大臣アレクサンデル・マッハ（Alexander Mach）が最も信頼する忠実な部下の一人と

＊Vanda Rajcan, “Anton Vašek, Head of the Interior Ministry’s 14th Department, His Responsibility, and Information about the Deportees,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide* (*Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25–26 August 2015*), pp. 124–139. ジリナにおけるこの研究会の主催団体は International Christian Embassy Jerusalem と Institute of Historiy of Slovak Academy of Sciences であり，研究会の開催と論文集の刊行には Conference on the Jewish Material Claims to Germany からの助成を受けた。訳文中の［　］内は訳者による。翻訳出版は原著者の許諾済み。

＊＊Vanda Rajcan, Northwestern University, USA
＊＊＊本学名誉教授

［訳注1］第一次世界大戦後にはオーストリア・ハンガリー帝国が崩壊し，チェコスロバキア第一共和国が誕生した（1918年）。この国は，西から順にボヘミア（ベーメン），モラビア（メーレン），スロバキア，カルパチア・ルテニアの4地域で成り立っていた。1938年3月にオーストリアを併合（独墺合邦（アンシュルス））したドイツは，さらにミュンヘン会談（1938年9月）においてドイツ人の保護を口実とする領土要求を通し，ズデーテン地方を割譲させて併合した。その翌年3月にドイツは，ボヘミアとモラビアを自国の保護領とした（ボヘミア・モラビア保護領。ベーメン・メーレン保護領とも）。この直前に，ドイツからの後押しを受けたスロバキアの反チェコ勢力は，一定の自治権を持つ反チェコ，親独，反ユダヤの衛星国スロバキア共和国を建国させた。これをスロバキア自治政府とも言う。（なお，カルパチア・ルテニアも独立したが，後にカルパチア・ウクライナ共和国として独立した（1939年）。）1939年8月に独ソ不可侵条約を締結したドイツは，同年9月1日，ポーランドに侵攻し，ここに第二次世界大戦が勃発した。スロバキア軍はかねて自国に進駐していたドイツ軍とともに，この侵攻作戦に参加した。以後，第二次世界大戦の終了まで，スロバキアは枢軸国側として英米ソなどの連合国側と対峙した。本稿の「主人公」アントン・ヴァシェックはこのような時代に生き，1942年4月から1944年9月まで，スロバキア内務省でユダヤ人問題を所管する高級官僚（内務省第14局長）として強制移送に関与し，戦後その責任を問われた。

なったが[1]，1946 年 6 月には 6 万人以上のスロバキア・ユダヤ人にたいする人種差別，250 万スロバキア・コルナの収賄，親ナチ・反ソのプロパガンダの出版により起訴された。スロバキア国民法廷に立たされたのには，どのようなことがあったのだろうか。

アントン・ヴァシェックが内務省に職を得るかなり以前から，スロバキアでは，反ユダヤ法制が敷かれていた。1940 年のアーリア化法によってユダヤ人財産が没収され，非ユダヤ人（いわゆるアーリア人）に格安で払い下げられた［アーリア化］。国の手によって，1941 年～1942 年には，ユダヤ人所有の企業が 1 万 2000 社以上もアーリア化されたり清算されたりした[2]。270 条からなるユダヤ法（*Židovský kódex*）は，その目的，詳しさ，幅広さの三拍子が揃ってニュルンベルク法を凌ぐことを，ルダーク［政権党のフリンカ・スロバキア人民党の党員とその支持者］の幹部は自慢の種にしていた。スロバキア駐在ドイツ公使ハンス・E. ルディン（Hanns E. Ludin）も，スロバキアのユダヤ法は徹底を通り越してドイツのニュルンベルク法よりも厳しいと認めていた[3]。ユダヤ法の条文の多くはユダヤ人だけでなく，「混血アーリア人」とユダヤ系の人々をその適用対象としていた。ユダヤ法は，すべてのユダヤ人に黄色い星の着用を義務付け，一切の基本的人権を剥奪し，ユダヤ人センター（Ústredňa Židov：ÚŽ）以外の団体への加盟を禁止するばかりか，ショッピングの時間を制限し，ラジオ，電話機，貴重品の所有を禁止した[4]。ユダヤ人コミュニティは貧困化を余儀なくされたが[訳注2]，それを追い風にして，ユダヤ人を社会問題の元凶とか，厄介なお荷物として描き出すプロパガンダが勢いを増した。

1942 年にスロバキア内政で最強の権力を掌握していた首相ヴォイテフ・トゥカ（Vojtech Tuka）と内務大臣アレクサンデル・マッハは，スロバキア人労働者 2 万人をドイツに追加派遣して，戦時中の労働力不足に喘(あえ)ぐ第三帝国を助けることにした。「労働に適したユダヤ人」の派遣が構想されたのは，アントン・ヴァシェックが内務省第 14 局に着任するよりも前である。その後，全ユダヤ人の強制移送について交渉したトゥカは，スロバキア側が移送される者一人につき 500 ライヒスマルクという法外な「再定住費」をドイツに支払うことに合意した。最終的に，スロバキアはその 7 割あまりを支払った。この資金の出所は国家予算ではない。没収してアーリア化した［ユダヤ人］資産を現金化して支払ったのである[5]。内務大臣マッハと首相トゥカは，強制移送と虐殺の代価をユダヤ人に支払わせたわけである。

（1）United States Holocaust Memorial Museum Archives (USHMMA), Record Group 57. 004M, Folder 58, File Number 438. (USHMMA, 57.004M, 58/438)

（2）Jelínek, Ješajahu, *Dávidova hviezda pod Tatrami*, [Star of David under the Tatra Mountains,] Praha: Ipeľ, 2009, p. 37.

（3）Lipscher, Ladislav, *Židia v slovenskom štáte (1939–1945)*, [Jews in the Slovak State (1939–1945),] Bratislava: Print-Servis, 1992, p. 54.

（4）Ústav Pämati Národa, “Nariadenie zo dňa 9. septembra 1941 o právnom postavení Židov.” [Institute of the Pämati Nation, “Ordinance of 9 September 1941 on the Legal Status of the Jews.”] Available online: http://www.upn.gov.sk/data/pdf/vlada_198-1941.pdf

［訳注 2］事業所のアーリア化と清算，専門的職業従事者としての就労制限，「アーリア人」家庭での家政婦としてのユダヤ人の就業禁止などによって，ユダヤ人は急速に貧困化した。エドゥアルド・ニジニャンスキー「スロバキアのホロコースト（1938 年～1945 年）」（木村和範訳）『学園論集』（北海学園大学）第 179/180 号合併号，2023 年 3 月，99 頁以下（原題は Nižňanský, Eduward, “Holocaust in Slovakia 1938–1945” であるが，日本語版が書き下ろしである）。

（5）Kamenc, Ivan, *Po stopách tragédie*, [On the Trail of a Tragedy,] Bratislava: Archa, 1991, p. 68.

アレクサンデル・マッハ，イジドール・コソ（Izidor Koso），ゲイザ・コンカ（Gejza Konka）（ヴァシェックの前任第14局長）が強制移送の計画を策定した1942年3月ころ，アントン・ヴァシェックは一介の内務官僚であった。最初の5本の移送列車は，1列車あたり1000人というドイツが設定した厳格な割当を遵守して編制されることになっていた。内務大臣は，フリンカ警固団（フリンカ・スロバキア人民党の準軍事組織）と憲兵隊にたいして地元ユダヤ人の逮捕権を与えた。強制移送のおかげで，フリンカ警固団の隊員［以下，「フリンカ兵」と言う。］や憲兵は，押収した現金や貴重品で懐を潤すことができた。首相や内務大臣だけでなく，それ以外の政治家や高官も，ユダヤ人にたいして行使できる権限は制限されることがなく青天井であったこともあり，フリンカ兵や憲兵による強制移送者の取扱は，野放しで残忍であった。その取扱が抑制されたのは，兵站（ロジステクス）に問題があるときだけであった。コンカは大風呂敷を広げて，5日間で5000人のユダヤ人をスロバキアから追放しようとしたが，それはできない相談であった。地方の役人が村々からそれだけ多くのユダヤ人をそんなに早くかき集めることはできなかったからである。

こうして，最初の移送列車は計画通りには出発せず，その失敗から1942年4月初旬に大規模な人事異動が行われた。内務大臣アレクサンデル・マッハは，強制移送の実行力に欠けるとして，第14局長ゲイザ・コンカを更迭した。たとえばブラチスラバ郊外のパトローンカ強制収容所から最初に移送されたユダヤ人女性は，770人に留まり，必要な1000人には届かなかったからである[6]。そのころの出来事について［戦後の］公判で尋問されたマッハは，コンカを交代させたのは「健康上の理由」であると供述し，それ以上は詳しく述べることがなかった[7]。スロバキアにおけるユダヤ人問題にかんする元ドイツ顧問官ディーター・ヴィスリチェニー（Dieter Wisliceny）による1946年の証言によれば，知る限りではあるがと断った上で，「コンカの更迭は予想外でした。彼は，いくつかの汚職事件に巻き込まれたとかで，捜査の手が及んでいました。」と供述した[8]。理由はともかくとして，マッハはコンカを内務省内で異動させ，1942年4月3日にその後釜としてアントン・ヴァシェックを起用した。ヴァシェックが1942年4月から1944年9月までユダヤ人問題を取扱う局（内務省第14局）の局長を務めることになったのは，そのようなわけである。

［戦後］ほとんどのヨーロッパ諸国では国民法廷が開廷され，対独協力者（collaborators）に有罪判決を下したり更生させたりした。スロバキア国民議会（Slovenská národná rada：SNR，［スロバキアの立法機関］）にかんする法律（1945年法律第33号）によって，スロバキアには，三層構造の応報的司法制度（a triple-tier retributive justice system）］が設けられ，裁判所の規模が定められるとともに，有罪となる事犯の概要が策定された[9]。スロバキア国民議会は，裁判所［国民法廷］が1947年12月まで機能することを認め，この裁判所にたいして対独協力，反逆，スロバキア国民蜂起[訳注3]，チェコスロバキア共和国転覆などの犯罪に刑罰を科することを承認した。それまでの刑法には定めがなかったこれらの犯罪にたいしては，死刑が科されることもあった。フリンカ警固団やフリンカ・スロバキア人民党地方組織への加入などの微罪には，

（6）USHMMA, RG.57.004M, 59/111–112.

（7）USHMMA, RG.57.004M, 59/652.

（8）USHMMA. RG.57.004M, 60/186–98.

（9）Beňa, Jozef, *Slovensko a Benešové dekréty*, [Slovakia and Benes Decrees,] Bratislava: Belimex, 2002, p. 199–210.

［訳注3］1944年8月に勃発した反独蜂起。ドイツ軍に鎮圧されスロバキアは占領された。

財産没収，禁固，市民権剥奪などの刑罰が科された[10]。

［国民法廷は］7 人で構成される評議会が事犯を審理するが，法の定めるところにより評議会議長［裁判長裁判官］と副議長［陪席裁判官］は職業裁判官であった[11]。ヴァシェック裁判の議長［裁判長］は，イゴール・ダクスネル（Igor Daxner）が務めた[12]。残りの裁判官 6 人と補欠裁判官 2 人は，スロバキア共産党と民主党の二大政党が選任した。このことから分かるように，国民法廷の裁判官の構成は，実に政治的であり，法律に精通した者が選出されるというよりは，むしろ 1946 年の国政選挙による国内情勢を反映したものであった。裁判官の法律上の最低要件は，チェコスロバキア国民であること，21 歳以上であること，読み書きができることであった[13]。

裁判所は，含むところがあって起訴すべき最初の被告人の一人としてヴァシェックを選んだ。ヴァシェックには十分すぎるほどの証拠があり，有罪判決が出されることが，ほぼ確実視されていたからであろう。スロバキア国民議会の任命による主任検察官二人（ユライ・シュヤン博士（Dr. Juraj Šujan）とミハエル・ゲロー博士（Dr. Michael Geró））が，ヴァシェックにたいする起訴状を準備し裁判に備えた。ヴァシェックは，冒頭陳述の 16 日前に，事前に国民議会が承認した弁護士名簿の中から，大学時代の旧友ヨゼフ・ミロ（Jozef Mill'o）を弁護人に選任した[14]。

裁判は，1946 年 6 月 25 日から 7 月 26 日まで，ブラチスラバの「司法広場」で行われた。連日，内外の報道関係者がこの裁判を報じた。傍聴人は，生存者とその家族でその大半が占められ，証言にたいしてヤジを飛ばした。評議会議長［裁判長］ダクスネルは，終始，傍聴人は静粛にするようにと注意し，従えなければ退廷させると迫った。特派員のために法廷には通訳が 4 人いて，ドイツ語，英語，ロシア語，フランス語に通訳した[15]。

検察当局は，スロバキアの独立（1939 年 3 月）や失敗に終わったスロバキア国民蜂起（1944 年 8 月）のときの違法行為についてはアントン・ヴァシェックを起訴しなかった。ヴァシェックがそのいずれにも関与していないと認定した検察側は，ユダヤ人の強制移送（1942 年）と収賄（1943 年）を軸に公訴を起こした。戦時中のスロバキア［自治政府］の詳細を論じた起訴状は，法廷向けに歴史を記述したものであるが，歴史の記録としてその後の裁判でも役に立つとともに，一般大衆にとっても有用な歴史の記録になった。検察側は，内務大臣マッハと首相トゥカをナチス・ドイツへの主犯格の対独協力者（collaborator）と見た。最高権力の座にあったこの二人は，政策に直接の影響を与えるばかりか，それによって利益を得たからである。検察側は，16 の法律のほかに，1945 年法律第 33 号第 3 の B 条に基づいて，内務省におけるヴァシェックの役割を明らかにした。同条によれば，対独協力者とは，「政治活動によりファシストに抗(あらが)った民主的な個人・組織への迫害を命ずるか，組織的な迫害を実行するか，迫害をなそうとした者。…… 人種的，民族的，宗教的，政治的関係やファシスト的な信条に基づいて，他人に不当な損害を与えた者。…… スロバキア人に立ち退きを命ずるか，外国の強制収容所への移動を命ずるか，もしくはドイツの戦争遂行に利するために労働するよう命じた者 ……。」と定義されてい

(10) *Ibid*., p. 199-200.
(11) *Ibid*., p. 201.
(12) *Ibid*., p. 201.
(13) *Ibid*., p. 200.
(14) USHMMA, RG.57.004, 57/285-286.
(15) USHMMA. RG.57.004, 59/113-115.

る[16]。検察官シュヤンは，職務にのめり込んだヴァシェックがスロバキアの国政に関与して，5万7000人以上ものユダヤ人市民を外国の強制収容所に送るという人種的迫害を実行したと主張した[17]。それとともに，被告は予審尋問で罪の一部を認め，証人尋問がすべて終了した後には有罪判決が下されることを国民法廷に確約したことを明らかにした[18]。

検察官シュヤンは，人種差別という広いカテゴリーにくくってヴァシェックを刑事訴追した。このような訴訟戦術を執ることによって，シュヤンはすべての容疑を並行して取り扱うことができるようになったが，以後の訴訟手続はより難しくなった。具体的に言えば，様々な容疑は，国家ぐるみの反ユダヤ主義体制への被告人の関与，スロバキア・ユダヤ人にたいする組織的な検束，さらには在外強制収容所への強制移送に及び，それらには，ユダヤ人局［内務省第14局］の局長としての被告の三重の主要罪状（強制移送の調整，ユダヤ人の強制労働にたいする指揮監督，反ユダヤ主義的な命令の発令）が入り混じっていたからである。

ヴァシェックの最初の任務は，1942年4月～1942年10月にアウシュヴィッツとルブリン県の強制収容所に送った57本の移送列車の調整であった。検察側は，これらの強制収容所で生き残ったスロバキアのユダヤ人が5万7000人中わずかに252人であることを繰り返し述べた[19]。移送の決定がヴァシェックの上司によるものか，被告人本人によるものかはともかくとして，ヴァシェックが第14局に赴任すると，強制移送は様変わりした。コンカの在任中は「就労可能」のユダヤ人だけがスロバキアを出国したが，4月になると家族ぐるみの移送へと変化したからである。ヴァシェックはすべての強制移送の場に居合わせていたわけではないが，公判記録によれば，ジリナ発の3本の移送列車では陣頭に立って指揮を執ったと言われている。ヴァシェックが内務省で几帳面に録取していたことも検察側の追い風になった。

検察側証人（複数）は，「70代の老人，子ども，身体障がい者，知的障がい者」が移送列車に乗せられたと証言した[20]。検察側は，そのようなユダヤ人を労働収容所に送るのは道理が通らないと主張した。ラビのアルミン・フリーダー師（Armin Frieder）は，ヴァシェックの有罪を強く証明する証拠を遺(のこ)して死亡し［1946年6月21日］，強制移送の責任は彼にあるとした。1946年4月20日の証言録取で，フリーダー師は，強制移送を停止することができたヴァシェックなら，賄賂(わいろ)を取らなくても上手に移送計画を阻止できたはずだと主張した。ラビ［のフリーダー師］への証言録取は重大な人権侵害の重さを計量するものでもあった。その録取によって，ヴァシェックが「作業部会(ワーキング・グループ)」［ユダヤ人センター内のユダヤ人救援非合法組織］から受け取ったとされる賄賂のリストが明らかにされたからである[21]。

アントン・ヴァシェックの第二の罪状は，セレッジ，ノヴァーキー，ヴィーネにあるユダヤ人強制労働収容所の監督についてであった。囚人のような状態で収容され，そこで労働していた者の中には，各省庁による強制移送免除証明書が交付された「経済的に重要なユダヤ人」も含まれていたが，その収容所はさながら一つの経営単位をなしていた。内務官僚とユダヤ人センターの幹部は，収容所に

（16）Beňa, Jozef, *Slovensko a Benešové dekréty*, [Slovakia and Benes Decrees,] p. 200.
（17）USHMMA, RG.57.004M, 59/92.
（18）USHMMA, RG.57.004M, 59/101.
（19）USHMMA, RG.57.004M, 59/100.
（20）USHMMA, RG.57.004M, 59/71, 59/55.
（21）USHMMA, RG.57.004M, 59/480.

たいして様々な産業を割り当てたからである。たとえば，セレッジは家具製作，ノヴァーキーは洋服仕立てが専門で，ヴィーネは公共工事というように。最大のノヴァーキー強制労働収容所は約 1800 人の囚人を収容し，最小のヴィーネ収容所には 300 人の労働者がいた。収容所長は，スロバキアの国外にあった労働収容所と較べると，ユダヤ人を比較的「しのぎやすい」生活環境の元に置いていたが，それは人道的な理由からではない。生産性を最大化するためであった。検察側は，このような労働収容所に 3500 人以上ものユダヤ人を不法に収監したとして，ヴァシェックを起訴した(22)。

裁判の過程で，検察側は，ヴァシェックが単に「命令に従った」だけの下級役人ではないことを明らかにした。ヴァシェックは，現場担当官と連絡を取りながら注意深くバランスをとって事に当たった。ヴァシェックは第 14 局の最高幹部としての絶対的権限を事あるごとに見せつけて，フリンカ警固団の現場指揮官には個人的な責任を負わせたが，その一方で，ヴァシェックは現場担当官と現場指揮官とが連携してはじめて，強制移送が成功するという機微もわきまえていた。

検察側は，内務省第 14 局長に就任してこのかた，ヴァシェックが直々(じきじき)にユダヤ人の強制移送を命じ，必要に応じて強制労働収容所から収容者を抽出して，移送者の員数を揃えたと主張した。ジリナ強制収容所司令官ルドルフ・マルチェック（Rudolf Marček）は，「署名人をヴァシェックとする命令が内務省から届けられました。」と証言し，その命令には，「次々と出発する移送列車に必要な人員を集めよ。」(23) とあったことも証言し，さらに「受け取ったどの命令にも，ヴァシェックはいつも内務省の代表者として署名していました。」(24) と続けた。ブラチスラバ＝パトローンカとセレッジの強制収容センター司令官イムリフ・ヴァシナ（Imrich Vašina）の証言もマルチェックと同様である。ヴァシナは，「私が被告人に，ドイツではユダヤ人に何が起こっているのですかと尋ねると，知らない，口出しせずに自分の仕事のことだけを考えておけと言いました。被告人は私たちに厳しく接し，ユダヤ人は送り出さなければならない，そうしないとおまえたちをイラヴァ［ブラチスラバの北東約 140㌔㍍。収容所があった。］に送ってやるぞと言いました。」(25) と述べた。

スロバキア鉄道は，ヴァシェックとジリナ収容所司令官ルドルフ・マルチェックとの間でやり取りされた連絡文書の詳細なリストを国民法廷に提出した。1942 年 4 月 16 日にユダヤ人 988 人を乗せてジリナを出発した移送列車は，午前 4 時 28 分に［スロバキアの］チャドカ駅に到着した［ジリナ（スロバキア）の北約 30㌔㍍，クラクフ（ポーランド総督府）の南西約 130㌔㍍］。その夜行列車はいつも深夜にポーランドとスロバキアの国境に到着した。そのために，地元住民は，移送の様子，ユダヤ人にたいする暴行など，強制移送の全体像を知ることができなかったが，スロバキア鉄道が提出したこれらの補足資料は，ヴァシェックがユダヤ人の敵であることを活写しているだけではなかった。スロバキアの内外にいたスロバキア・ユダヤ人についての記録でもあった(26)。

1942 年 3 月 25 日，内務大臣マッハへの状

(22) Nižňanský, Eduard, Igor Baka, and Ivan Kamenec (eds.), *Holokaust na Slovenesku 5: Židovské pracovné tábory a strediská na Slovensku 1938–1944*, [Holocaust in Slovakia 5: Jewish Labour Camps and Centres in Slovakia 1938–1944,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec, Vojenský historický ústav, 2004, p. 11.

(23) USHMMA. RG.57.004M, 60/852.

(24) USHMMA, RG.57.004M, 60/745.

(25) USHMMA, RG.57.004M, 58/361; 57.004M, 58/437. 219/98.

(26) USHMMA, RG.57.004M, 59/521.

況報告の中でスロバキアのいわゆるユダヤ人問題について手短に要約したアントン・ヴァシェックは，その時点で1942年のスロバキア・ユダヤ人にかんする必要な情報をすべて持っていた。彼は，「前回の人口センサスによる総数8万9000人のユダヤ人のうち，今日までに約5万3000人が移送されたが，少なくとも1万人はハンガリーなどの外国に逃れたか，所在不明である。洗礼を受けたユダヤ人，非ユダヤ人と結婚したユダヤ人（その世帯員を含む）は約8000人である。」[27] と報告した。ヴァシェックは指令文書の中身に同意した上で，かれこれ数十の措置に署名したと思われる。

これらの指令文書の中にはヴァシェックを有罪とする証拠もあったが，それに加えて，ヴァシェックの性格とユダヤ人問題局［内務省第14局］での彼の行状について語った証人も数人いた。彼らは，ヴァシェックのことを，誰にとっても過酷な職場を作り出した人物であり，冷淡でとても自己中心的だったと言い[28]，たとえばヴァシェックの職務権限については，ヴァシェックの了解がなければ（あるいはヴァシェックが知らないままに），労働収容所から釈放されることはなかったと証言した。内務省職員ヤーン・ブチェネツ（Ján Bučenec）は，「被告人は，誰を収監し，誰を釈放しなければならないかを命令しました。」[29] と述べた。ユダヤ・センターの元職員アルフレッド・ソルディン（Alfred Soldin）は，恐怖政治が敷かれていたとして次のように述べている。「被告人と一緒に働き，彼と情報を交換した人は，一様に恐怖で震え上がっていました。これは事実です。ユダヤ人だけではありません。ユダヤ人でない人も怯（おび）えていました。被告人がゲーリング通りに投獄しようとするからです。…… 仕事をしないなら，収容所にぶち込んでやると被告人が言ったことを覚えています。」[30]

端的に言えば，検察側の証人の目には，ヴァシェックが頻繁に脅迫しては望みどおりの結果を得るという，恐ろしい上司と映っていた。ヴァシェックには，勘気を招いた者に極刑を下す権限があったからである。

これらの目撃証言によれば，ヴァシェックは脅しをかけていたと言われている。そのとき，ヴァシェックは誰にはばかることもなく内務大臣マッハに面会できる立場にあることを利用した。毎週数回，この上司と面談していたヴァシェックは，内務省のどの局長よりも数多くマッハに面会した[31]。ヴァシェックは既成の上下関係を露骨なまでにないがしろにしたために，しばしば飛ばされたり無視されたりした首相官邸長官イジドール・コソ（Izidor Koso）の怒りを買ったようである。1942年～1943年には，ヴァシェックはマッハが最も信頼をおいた相談相手の一人であった。このことを示す証拠がある。ヴァシェックほど頻繁に内務大臣マッハに面会できる人物は，ごく少数しかいなかった。被告人［ヴァシェック］は誰にも邪魔されずに大臣に面会し，ユダヤ人のことで意見を述べることができた[32]。ヴァシェックが重要な情報を掴（つか）んでいた（あるいは簡単に手に入れることができた）のは，こういう事情があったのである。

ヴァシェック裁判の冒頭で浮かび上がった

（27）Hubenák, Ladislav, (ed.), *Riešenie židovskej otázky na Slovensku 1939–1945: dokumenty*, [The Solution of the Jewish Question in Slovakia 1939–1945: documents,] Bratislava: Slovenské národné múseum — Múzeum židovskej kultúry, [Slovak National Museum - Museum of Jewish Culture,] 1994, pp. 124–125.

（28）USHMMA. RG.57.004M, 59/770–729.

（29）USHMMA. RG.57.004, 59/162.

（30）USHMMA, RG.57.004M, 60/114.

（31）USHMMA. RG57.004M, 60/741.

（32）USHMMA, RG.57.004M, 60/114.

重要な問題のいくつかを，簡単に述べると，それは，何を知っていたか，いつのことか，絶滅収容所の本当の姿とそこでなされた事柄を直接知ったのはいつか，ということであった。裁判の冒頭で，ヴァシェックは，1946 年 6 月になってようやく，強制移送と死の収容所のことを知ったと主張した[33]。ところが，すぐさま，そんな抗弁は信用されないと気づいたヴァシェックは証言を翻(ひるがえ)して，1943 年 9 月までは死の収容所のことを知らなかったと主張した。裁判の過程で偽証の証拠があることに気づいたのである。しかし，ユダヤ人センター元職員ティボール・コヴァーチ（Tibor Kováč）は，1942 年 8 月 14 日に，えも言われない恐怖の強制収容所のことを書いたハンガリー語とスロバキア語による二通の書簡をヴァシェックに手渡したと証言した。時の流れを無視したヴァシェックは，今度はその書簡を受け取るやただちに内務大臣マッハに直談判して，これらの告発についての調査委員会を設置する必要を進言したと述べた。しかし，おそらくこれもまったくの偽証であろう。内務省でヴァシェックの同僚であったパヴォル・マラ（Pavol Maľa）の証言によれば，遅くとも 1942 年秋までには被告人は死の収容所について知っていたからである[34]。ルドルフ・マルチェクも，ヴァシェックがジリナ強制収容所を視察した 1942 年 8 月には，ユダヤ人の殺害について知っていたと証言している。ジリナ収容所に到着したヴァシェックは，ユンゲル（Junger）という名の脱走者を尋問しているからである[35]。さらに，ノヴァーキー労働収容所に収容されていたユライ・スピッツェル（Juraj Spitzer）は，1942 年 9 月 22 日にヴァシェックと収容所司令官との間の会話を耳にしたが，それについて次のように証言している。「ユダヤ人は手際よく殺害され，1 年以上は生きられないことが分かりました。二人の会話からは二言か三言しか聞き取ることができませんでしたが，彼［ヴァシェック］は，『たとえ神が邪魔しようとも，強制移送は続けなければならない。』と言っていました。」[36] 被告人が，1942 年夏にはアウシュヴィッツのような現場の真実を知っていたことは明らかである。

裁判初期におけるヴァシェックの弁明は，戦後のヨーロッパ各地で開廷された対独協力者にたいする裁判でしばしば見られたのと同様に，巨大国家機構の中で小さな役割しか果たさなかったということにフォーカスしている。ヴァシェックは上司の命令に従っただけ，というわけである。内務大臣マッハが第 14 局長として採用すると通知したとき，いくつかの懸念はあったが，それを受け入れるより他に選択の余地はなかったと，被告人は主張した[37]。ヴァシェックによる弁明の根拠となったのは，彼が赴任する前にすでに強制移送が始まっていたという事実である。1946 年にヴァシェックは，「私はマッハの部下でした。私は内務大臣からの命令を実行しました。」と主張し，さらに，「私は，高齢者，知的障がい者，精神病患者を強制移送せよとは

(33) USHMMA, RG.57.004M, 58/171.

(34) USHMMA, RG.57.004M, 58/487.

(35) USHMMA, RG.57.004M, 58/488. [Ján Hlavinka, “Dionýz Lénard and Leo (Ladislav) Junger - Escapees from the Lublin District and their Effort to Inform the World About the Mass Killing of Jews,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide* (Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25–26 August 2015), pp. 39–62, esp. p. 58f.（ヤーン・フラヴィンカ「ディオニュズ・レーナルドとレオ（ラディスラフ）・ユンゲル　── ルブリン県からの脱走者とユダヤ人大量殺戮についての世界への通報 ──」（木村和範訳）『経済論集』（北海学園大学），第 70 巻第 2 号，2022 年 9 月，114 頁以下。）]

(36) USHMMA, RG.57.004M, 59/233–234.

(37) USHMMA, RG.57.004M, 59/632.

命令しませんでした。強制移送しろと命令したのはマッハです。しかし，私はそれに抗(あらが)って医師の管理下に置かせました。」[38] とも主張した。要するに，ヴァシェックは批判の矛先を前任者と上司に向けたのである。アレクサンデル・マッハは，ヴァシェックに圧力をかけて就任を受け入れさせたのが自分であり，そのときにヴァシェックの不安を取り除いてやったことに間違いはないと陳述した。そして，「当初，彼［ヴァシェック］は渋っていましたが，私の押しに負けて，不承不承，就任しました。…… 私は，彼が自分の思うままに何かをするのではない，私から直接の命令によるか，あるいは私の許可を得て行うことになると確約しました。」と証言している[39]。マッハにとって不利になるこの罪状認否は，6ヶ月後のマッハ裁判でも行われるはずであったが，そうはならなかった。

ヴァシェックが国民法廷の判事たちに訴えようとしたのは，彼がスロバキアの労働収容所の環境を改善しようとしたこと，強制移送の前に高齢のユダヤ人への医療支援を強化しようとしたこと，ユダヤ人センター職員であったラビのアルミン・フリーダー師やアンドレイ・スタイナー（Andrej Steiner）とは昵懇(じっこん)の関係にあったこと，であった。ヴァシェックは，辞任したいと思ったことは幾度もあったが，その都度ユダヤ人センターの幹部が説得して踏みとどまらせたと主張した。彼は，何人かのユダヤ人の強制移送を差し止めたことに注意を引きつけて，自分の後任が来れば強制移送が再開した可能性は高かったと説明した。無理のないこととは言え，ヴァシェックは何人かのユダヤ人への「善行」なるものを強調し，「収賄」容疑には知らぬ顔の半兵衛を決め込んだ[40]。

アントン・ヴァシェックは，自分のことを政府高官でありユダヤ人の友人でもあった二重スパイと主張し，冒頭陳述では，「始めから強制移送には反対でした。可及的速やかに移送を停止させようとしました。私には，それを証明してくれるアーリア人だけでなく，同僚として働いたユダヤ人センターの（元）職員がいます。何はさておき，私は移送を停止しようとしました。少なくとも遅らせようとしました。」[41] と主張した。そうするには6ヶ月もかかったと，ヴァシェックは主張したと言われている。その理由については，「当時，私には影響力がなくて阻止できませんでした。ドイツ軍や内務大臣などの急進派からの信頼を勝ちとる必要があったのです。」と説明した[42]。スタイナーとフリーダー師が不利な証言をしたと知ったとき，ヴァシェックは裏切られたと思った。フリーダーが死んだときは，悲しかったとヴァシェックは述べた。ヴァシェックの陳述はこうである。「最高の証人が死んだのだから，最も悲しい出来事が起きてしまった。私はこう弁護士にこう言いました。私にとって不利な証言をフリーダーがしたと分かったとき，彼の証言が空恐ろしくなりました。」そして，フリーダー師とスタイナーがヴァシェックを嵌(は)めようと図って，不当にも陥れようとしていると邪推した[43]。ヴァシェックによれば，収賄容疑は自分を破滅させるために仕組まれた罠(わな)にすぎなかったのである。

ヴァシェックの証言から明らかなことは，彼がマッハに反対意見を述べるだけの力を持っていたということだけでない。懲罰を心配することなく恐れず重要な内政についても権限を行使できた。自分で言うほどの無力者(もの)

(38) USHMMA, RG.57.004M, 59/95–98.
(39) USHMMA, RG.57.004M, 58/98.
(40) USHMMA, RG.57.004M, 60/554.
(41) USHMMA, RG.57.004M, 60/551.
(42) USHMMA, RG.57.004M, 60/553.
(43) USHMMA, RG.57.004M, 60/552.

ではなかったのである。その上，ヴァシェックは収監や死刑を思い煩(わずら)うことなく，やろうと思えば，その職位に留まるか辞任するかを毅然として選択できた。ヴァシェックは，このような主張にたいして次の二つの点から抗弁した。第一に，マッハの権力を前にすれば，1942 年のスロバキアで進退を勝手に選択できる者がいるかと異議を唱えた。ヴァシェックは，「私は命令に従いました。1942 年の春にトゥカやマッハに抵抗した人がいればお目にかかりたいものです。」[44] と述べ，体制の政敵を収容するイラヴァの強制収容所に移送されるのではないかと心配していたと言っている。それと同時に，裁判が始まったころには，マッハから全幅の信頼を得ていたとヴァシェックは証言している。彼自身，「私を信頼したからこそ，マッハはあのような重要な任務に就かせたのです。」と明言している[45]。ヴァシェックは，この二つの供述の矛盾に気づいてはいなかった。彼は，完全な無実を主張できないのであれば，曰(いわ)くありげな疑惑をせめてもの置きお土産にしようと考えたのかもしれない。

［ヴァシェックの抗弁の］二点目は，汚職と賄賂（具体的には，ヴァシェックが 250 万スロバキア・コルナ～300 万スロバキア・コルナを手にしたこと）についてである[46]。1939 年～1945 年に袖の下を取ったスロバキアの官僚は，彼だけではない。言うところの「ユダヤ人問題」は，スロバキアの対独協力者が懐(ふところ)を豊かにするための，数え切れないほど多くの機会を作った。歴史学者として著名なスロバキアのイヴァン・カメネツ（Ivan Kamenec）は，［強制移送を］免除されんがための贈賄が当たり前のこととして許容されていたと指摘している。アーリア化を推進した者は，主としてユダヤ人が所有する事業や住宅を奪い取った。様々な法規（とくに後にユダヤ法と言われた政令）によって，ユダヤ人にはラジオ，時計，カメラ，その他の貴重品などの「贅沢品」の所有が禁止された[47]。

ユダヤ人の強制移送の全過程を隅々に至るまで設計し，それを実行に移したのが内務省第 14 局であったから，そのユダヤ人局を束ねたアントン・ヴァシェックは，最も多くの利益を得る立場にあった。ヴァシェックには，ユダヤ人からの収奪とその絶滅を通じて私腹を肥やすための利権，機会，動機があった。彼は，移送があまりうまく行かないように上手に手心を加え，それと引き換えに，儲けを生み出す成功企業の主になった。ユダヤ人の非合法組織「作業部会(ワーキング・グループ)」は，ヴァシェックに金を払い任務を放棄させたと言われている。賄賂は，スロバキアという場で彼の名声欲と権力欲を抑制したのである。

検察側は，汚職と賄賂に焦点を当てて，ヴァシェックの主たる動機と道徳的堕落を説明しようとした。ヴァシェックは，下は旅行や就職などのちょっとした免除のときの 5000 スロバキア・コルナから，上は強制移送を免除する場合の 2 万スロバキア・コルナに至るまでの料金体系を作ったと言われている。ヴァシェックは強制移送される者と国内の労働収容所に留まる者を決定した。裕福なユダヤ人を移送免除者名簿に記載したのは，自由と引き換えに親族から金銭や貴重品を巻き上げることができると知っていたからであろう。しかし，複数の証人が証言しているように，ヴァシェックは親族から金銭を受け取っていながら，当のユダヤ人を強制移送したこともある[48]。

検察側は，スロバキア政府の中で最高給を得ていた官僚の一人であったアントン・ヴァ

（44）USHMMA, RG.57.004M, 58/336.
（45）USHMMA, RG.57.004M, 58/985.
（46）USHMMA, RG.57.004M, 59/101-102.
（47）USHMMA, RG.57.004M, 59/71.
（48）USHMMA, RG.57.004M, 59/73.

シェックの月給が1500スロバキア・コルナであったことを様々な資料で立証した[49]。ヴァシェックは，上出来の収賄システムを作り上げただけではない。望んだ成果を上げるために新手の手法も編み出した。ずる賢いヴァシェックは，書面の証拠は残すまいとしたが，検察側は，それを暴(あば)き出す示す逸話の数々を法廷に提出した。1943年，ヴァシェックの娘は，ブラチスラバの一等地に建つ広々としたアパートを格安で購入した。娘のソーニャ・ヴァシェッコヴァ（Soňa Vašeková）は当時7歳だったから，当然ながら父親が法定代理人となった[50]。［ユダヤ人センターの］サムエル・ドヴォリーン（Samuel Dvorín）は，ヴァシェックの蔵書500冊（2万スロバキア・コルナ相当）を購入して，家族の移送免除証明書を発給してもらったと証言した[51]。ユダヤ人センターの元幹部ティボール・コヴァーチは，ヴァシェックが政治的便宜を図る見返りに，顧客（複数）は掛け率の高いカードゲームをして被告人［ヴァシェック］を勝たせたと証言した[52]。ヴァシェックのお抱え運転手であったヤーン・ベラーン（Ján Belán）は，上司が大酒を飲み，カードゲームに興じている間，何時間もカールトン・ホテルの外で被告を待っていたことが何回もあったと証言している。この運転手は，ヴァシェックが不注意にも後部座席に蓋(ふた)を開けたままに置き忘れたブリーフケースの中を，好奇心に負けて覗(のぞ)いたことが何度かあったことを認めている。ヤーン・ベラーンの証言によれば，大金の入った封筒に封をしていないヴァシェックに，それを注意しようとすると，貴様の知ったことかと怒鳴ったとのことである。ヴァシェックは，ベラーンによる不利な証言に反論することはなかった[53]。

ヴァシェックの元上司であったアレクサンデル・マッハでさえ，ヴァシェックの「サイドビジネス」のことを知っていたが，ヴァシェック裁判では控えめの発言に留まった。マッハが無関心を装ったのは，おそらく彼もまた賄賂を受け取っていたからであろう。あるいは，友人を助けたかったのかもしれない。検察側は，マッハが1943年12月に秘書官に口述筆記させた書簡を法廷に提出した。この書簡の中で，マッハは道義にもとるヴァシェックの行動を非難し，すぐに止めるよう求めた。この書簡でマッハは，ヴァシェックのギャンブルについて苦情や匿名情報が増えていることも指摘している。マッハはヴァシェックに，このままでは早晩その筋の捜査から守れなくなると説諭した。マッハはヴァシェックにたいして「会話体の二人称」を用いたが，それは二人が親密な関係にあったことを示している。内務大臣は封筒に手書きで「郵送不可，手渡しの予定」と書き添えていた。そのことには，友人を保護して，内々で手紙を渡そうとする意図が隠されている[54]。

アントン・ヴァシェックのギャンブル依存症は，1942年～1943年のブラチスラバでは最悪の秘密の一つであった。ヴァシェックの同僚だった多数の証言によれば，ヴァシェックはその強力な地位を利用して，見返りに金銭を要求した。多くの人が，あのような生活をしてはヴァシェックの月給ではもたないと言っていた。アンドレイ・スタイナーとラビのアルミン・フリーダー師は，できる限り取引を記録しておこうとした。これらのユダヤ人センター元職員は，1942年10月から1943年12月までの間に，強制移送を再開させないために毎月10万スロバキア・コルナをヴァシェックに支払ったと主張した。スタイ

(49) USHMMA, RG.57.004M, 60/256-287.
(50) USHMMA, RG.57.004M, 62/15-17.
(51) USHMMA, RG.57.004M, 60/262.
(52) USHMMA, RG.57.004M, 61/212-213.
(53) USHMMA, RG.57.004M, 59/1021.
(54) USHMMA, RG.57.004M, 62/12-14.

ナーによると，この支払額の総計は優に 100 万スロバキア・コルナを超えている。スタイナーは，分かりきった理由から［この種の取引は口約束であったからであろう。］このことについては書面を提出できなかったが，ヴァシェックとフリーダー師との間のやりとりを知っている数人の名前を挙げた。ヴァシェックはスタイナーの記憶違いだと反論したが，スタイナーのほうは証言を翻さなかった[55]。

収賄容疑にたいしてアントン・ヴァシェックが取った法廷戦略の特徴は，収賄を否認し，証人とその証言の信用を失墜させようとして，証人と対峙することであった。ユダヤ人センターの元職員は，ヴァシェックにとって頭痛の種であった。彼らの一糸乱れぬぶれない証言は，被告を金の亡者で権力欲に塗れた不埒な輩として描き出したからであった。原告側と被告側がそれぞれ真実と認識している事柄の説明が衝突し合うようになるに従って，対決姿勢を取るヴァシェックの証言は精彩を欠いていった。ヴァシェックとの取引について検察側証人の証言が積み重ねられると，ヴァシェックはその証言を否認しなくなった。否認しても無駄だとなるや，アントン・ヴァシェックは第二の法廷戦術を画策して肯定に転じ，自分はユダヤ人センターの元職員数名と親密な関係にあり，友情で結ばれていたとして，そのあらましを述べた。ヴァシェックは，命の危険を冒してユダヤ人を助け，はっきりした理由がないのに，命令に従わないことが何十回もあったと陳述した。

自分の発言がラジオで実況放送されると錯覚したヴァシェックは，それに合わせるようにドラマチックな仕方で法廷に臨んだ。判事や傍聴人に話すのではなく，スロバキアの全国民に向かって演説をすることにしたのである。「全国津々浦々の皆さん，ラマチュ出身のアントン・ヴァシェックの話を聴いてください。私は抗弁書を書きたくありません。そこで，マイクを通して心中を吐露しようとしました。……」[56] 4 時間半に及ぶこの演説の中で，「世界に広がるユダヤ人問題」は歴史的存在として「ユダヤ人が定住したどの国にとっても積年の懸案」[57] であったと述べた。その上でヴァシェックは，本来の弁明に戻って，1942 年 4 月 3 日にマッハが［内務省］第 14 局長への就任を強いるまで，いわゆるユダヤ人問題にはまったく関心がなかったと主張した。公の場に姿を現した最後のときに，ヴァシェックは，みずからをスロバキア国民のための殉教者であり，また第 14 局長に任命されるという大きな不幸に見舞われた善良な市民でもあると印象づけようとした。そして，このようなことは誰にでも起こりうることだった，政治の舞台裏がはっきりすれば，歴史の審判は異なり，国民は自分の「罪」を別様なものとして見ることになろうと主張した[58]。

検察側は，被告人がユダヤ人にたいする国家犯罪に加担するばかりか，そこから金銭的な利益を得ていたと主張し，出世主義，物欲，名声欲がヴァシェックの動機であったことを上手に立証できた。ヴァシェックが書いた多くのものの中には反ユダヤ的な言辞が見られる。しかし，反ユダヤ主義というイデオロギーはヴァシェックの動機としてはさほど強くはなかった。必要かつ十分な証拠を挙げた検察官シュヤンは，「1943 年になるまでユダヤ人に何が起こったかを知らないと言うのであれば，被告人は月世界か，どこかに住んでいたことになるだろう。」[59] と述べ，ヴァシェックは戦時下のスロバキアで発言力を持

(55) USHMMA, RG.57.004M, 59/97-102.

(56) USHMMA, RG.57.004M, 61/550-553.

(57) USHMMA, RG.57.004M, 61/574.

(58) USHMMA, RG.57.004M, 61/552.

(59) USHMMA, RG.57.004M, 61/1089.

ち，個人的な考えを押し通した高級官僚であって，ただ「命令に従う」だけで言いなりになった官僚ではなかった人物として描き出した。それとともにシュヤンは，ヴァシェックが政策に影響を与えただけでなく，自己の利益のためにユダヤ人を酷(ひど)い目に遭わせたことも明らかにした。

1946年7月25日午前11時15分，スロバキア国民法廷は，アントン・ヴァシェックを絞首刑に処すと判決した[60]。復讐法（1945年法律第33号）で有効と認められる控訴は［判決後］48時間以内にと定めていたために，ヴァシェックと弁護士は，寛大な措置を求めてただちに嘆願書を作成した。国民法廷による有罪評決に預かって力を発揮した検事シュヤンは，減刑を求めたヴァシェックの土壇場での試みにたいして反対陳述を行った。この影響もあって，国民法廷が嘆願を棄却すると，ヴァシェックの弁護人ヨゼフ・ミロは，国民法廷が政治的偏向，予断，偏見に満ちた判決を下し，訴訟手続には不正があるので，依頼人［ヴァシェック］を寛大に取り扱ってしかるべきであって，弁護側証人の証言が許されていたならば，ヴァシェックへの判決は死刑ではなく，禁固刑になっただろうとも主張した。

国民法廷がヴァシェックに死刑を宣告したのは，ただちに元首相ヴォイテフ・トゥカへの公訴に取りかかりたかったからであろう。スロバキア・ルダーク政権の要人の一人［であったヴァシェック］は，死刑が執行されるその日になって，ようやく評議会のメンバー7人［ヴァシェック裁判の担当裁判官］と顔を合わせた。国民法廷は，アントン・ヴァシェックを裁くという第一の目標を達成した。検察当局は，1942年から1945年までに施行された様々なユダヤ人排斥法の内容を一般国民に通知し，国民法廷は，ヴァシェックを人種差別の主犯と断罪して，絞首刑を執行した。

無名の官僚アントン・ヴァシェックは，内務省の出世階段を駆け足で上り，ひとたび権力を掌握するや，信じられないほど強引で見境ないやり口で人を食い物にして懐を潤した。ヴァシェックは，スロバキアの「ユダヤ人問題」を担当する内務省第14局の局長として，独断で数千人に上るユダヤ人の運命を決定し，ユダヤ人から財産，貴重品，金銭を強奪したのである。スロバキア・ルダーク政権の中で最も強い権力を持つようになったヴァシェックは，内務大臣アレクサンデル・マッハの片腕として，絶対権力と言ってもよいほどの権力を行使した。この目立たない官僚の政治的キャリアは短かったのに，少なくとも何万人もの同胞の命に影響を及ぼした。野心となかなかの政治的なコネを糧としたヴァシェックは，私利私益のために巧みなまでにスロバキアの反ユダヤ主義と戦時中の政治を操(あやつ)った。そして，身をもって究極の代償を払った。

（60）USHMMA, RG.57.004M, 60/1071.

文　献　等

文書館

United States Holocaust Memorial Museum Archives (USHMMA)

参考文献

Vašek, Anton, *Protižidovské zakonodárstvo na Slovensku*, [Anti-Jewish Legislation in Slovakia,] Bratislava: Tlač Knihtlačiarského uč. spolku, 1942.

Beňa, Jozef, *Slovensko a Benešové dekréty*, [Slovakia and Benes Decrees,] Bratislava: Belimex, 2002.

Hubenák, Ladislav, (ed.), *Riešenie židovskej otázky na Slovensku 1939–1945: dokumenty*, [The Solution of the Jewish Question in Slovakia 1939–1945: documents,] Bratislava: Slovenské národné múseum — Múzeum židovskej kultúry, [Slovak National Museum] 1994.

Jwlínek, Ješajahu, *Židia na Slovensku v 19. a 20. storočí. Židia na Slovensku v 20. storočí*, [Jews in Slovakia in the 19th and 20th Centuries. Jews in Slovakia in the 20th century,] Bratislava: Judaica Slovaca, 2000.

Jelínek, Ješajahu, *Dávidova hviezda pod Tatrami*, [Star of David under the Tatra Mountains,] Praha: Ipeľ, 2009.

Kamenc, Ivan, *Po stopách tragédie*, [On the Trail of a Tragedy,] Bratislava: Archa, 1991.

Kamenc, Ivan, *Slovenský štát (1939–1945)*, [Slovak State (1939–1945),] Bratislava: Anomal, 1992.

Kamenc, Ivan, *On the Trail of Tragedy: The Holocaust in Slovakia*, Bratislava: H&H, 2007.

Lipscher, Ladislav, *Židia v slovenskom štáte (1939–1945)*, [Jews in the Slovak State (1939–1945),] Bratislava: Print-Servis, 1992.

Nižňanský, Eduard and Ján Hlavinka (eds.), *Arizácie v regiónoch Slovenska*, [Aryanization in Slovakia,] Bratislava: Stimul, 2010.

Nižňanský, Eduard, Igor Baka, and Ivan Kamenec (eds.), *Holokaust na Slovensku 5: Židovské pracovné tábory a strediská na Slovensku 1938–1944*, [Holocaust in Slovakia 5: Jewish Labour Camps and Centres in Slovakia 1938–1944,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, Židovská náboženská obec, Vojenský historický ústav, 2004.

Nižňanský, Eduard (ed.), *Holokaust na Slovensku 6: Deportácie v roku 1942*, [Holocaust in Slovakia 6: Deportations in 1942,] Bratislava: Nadácia Milana Simečku, 2005.

Ústav Pämati Národa, "Nariadenie zo dňa 9. septembra 1941 o právnom postavení Židov." [Institute of the Pämati Nation, "Ordinance of 9 September 1941 on the Legal Status of the Jews."] Available online: <http://www.upn.gov.sk/data/pdf/vlada_198-1941.pdf >

【付録】

序　文*

ナチスとその協力者による犯罪は，「ホロコースト（Holocaust）」とか「ショア（Shoah）」[(1)]と言われ，何十万頁もの科学的研究だけでなく，何百もの小説，映画，演劇など一般向けの作品も制作されている。今日，アウシュヴィッツはこれらの犯罪の象徴となっている。ナチスは，その地で100万人を上回るユダヤ人の組織的ガス殺を計画し実行したからである。しかし，アウシュヴィッツは，ヒトラーとその信奉者がナチスの人種理論に基づいて「人間以下（subhuman）」と呼んだ人々をガス室で大量殺戮した収容所の一つに過ぎない。歴史学者だけでなく一般の人々も，ガス室を備えたそれ以外のナチスの収容所（たとえば，ヘウムノ，ベウジェツ，ソビボル，トレブリンカ，マイダネク）について詳細に記述した数多くの研究成果を手にすることができる。

ナチスが組織的に行った大量虐殺（ジェノサイド）は，ガス室から始まったのではない。1941年6月のソビエト連邦への侵攻以降の大量処刑から始まったのである。このときの軍事行動は，文献上では「銃弾によるホロコースト（Holocaust by bullets）」とも呼ばれ，十分な記録が残されており，手にとって見ることができる。ナチスは，初期の大量殺人だけでなく，その頂点であるガス室での犠牲者の組織的殺害も秘密にしていた。加害者とその共犯者は，この行為が犯罪であることを強く自覚していたからである。

殺人者たちがその前代未聞の犯罪を隠そうと躍起になったにもかかわらず，（不完全で断片的ではあったが）大量処刑にかんする情報が流出し，戦時中には絶滅収容所にかんする情報も漏れた。ナチス・ドイツ傘下の枢軸国の各国軍隊（スロバキア軍を含む）はもとより，軍の指導部や政府要人も，旧ソ連（およびその同盟国）で処刑が実行された場所についてはそれがどこであるかの情報を掴（つか）んでいた。各国軍隊は殺害に当っていたからである。歴史学者たちは，反ヒトラー勢力が傍受したナチスの軍事暗号文を解読していたことを知っている。情報は断片的ではあったが，ナチスは死の収容所を隠しとおすことができなかった。収容所からの脱走者，ポーランドのレジスタンス戦闘員，秘密情報機関員が，占領下のヨーロッパ（および第三帝国の衛星国）からの犠牲者の移送先であるアウシュヴィッツなどの実相を世界に知らしめたからである。たとえば，早くも1942年にはポーランドのレジスタンスがポーランド亡命政府（ロンドン）に，アウシュヴィッツで何が起こっているかを伝えていたことが分かっている。1942年11月，ポーランド亡命政府は，何万人ものユダヤ人とソ連軍捕虜が「ガス室での即時絶滅という目的だけのために」アウシュヴィッツに移送されたという情報を入手した[(2)［訳注］]。

＊ヴァンダ・ラジカンの論文を最終論文とする全8編の論文からなるアンソロジー（Proceedings from the conference: *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide*, ed. by Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák, Žilina, Slovakia, 25–26 August 2015）の全訳完結を機に，ここに同書冒頭に掲載された「序文」と各論文のタイトル・筆者を訳出する。

（1）The Hebrew term shoah means “catastrophe”.
ヘブライ語のShoahの意味は「大惨事，破滅，破壊」（catastrophe）である。

（2）Bauer, Jehuda. *Úvahy o holokaustu.* Praha: Academia, 2009, pp. 224f.

［訳注］ポーランド亡命政府外務省（Republic of Poland, Ministry of Foreign Affairs）は，1942年12月に，入手した情報を16頁のリーフレットにまとめて，*The Mass Extermination of Jews in German Occupied Poland*, Published on behalf of the Polish Ministry of Foreign Affairs, by Hutchinson & Co. Ltd., London, New York and Melbourne を刊行した。Kenyon College（アメリカ合衆国）の Bulmash Family Holocaust Collection に収録されているこの

1943 年 5 月，ポーランド情報局はロンドンに向けて，アウシュヴィッツではユダヤ人 52 万人が殺害されたと発表し，さらに 1943 年 12 月には 64 万人の殺害を報じた[(3)]。イスラエルの歴史学者イェフダ･バウアー（Yehuda Bauer）は，その記念碑的労作『ホロコースト再考』（2009 年）の中で，「1944 年春までは，誰もアウシュヴィッツのことを知らなかったといつまでも思われているのはなぜだろうか。それはいつものことであって，ユダヤ人が大量殺戮されたなどと信じている者は誰もいなかったからである。」[(4)] と述べている。確かに，イギリスが入手したアウシュヴィッツの情報は，信じがたいものであった。第一次世界大戦のときにはプロパガンダのために残虐行為にかんするあらゆる話が飛び交ったが，それが語り継がれていたこともその一因であった[(5)]。

1944 年 4 月，スロバキア出身の二人のユダヤ人収容者がアウシュヴィッツを脱走した。アルフレッド･ヴェツラー（Alfred Wetzler）とルドルフ･ヴルバ（Rudolf Vrba）（本名ヴァルター･ローゼンベルグ（Walter Rosenberg））である。彼らは，スロバキアへの恐怖に満ちた危険な旅の末に，アウシュヴィッツでの大量殺戮の仕組みのすべてを事細かく解説した。ヴェツラーとヴルバの証言に基づく報告文書に触れる機会があった人たちにとって，それは，恐ろしい真実の結末をつまびらかにするものであった。今日に至るまで，この情報がいつどこに届けられ，どのようにして拡散されたかについては，歴史学者だけでなく，当の二人もまた意見を闘わせている。

脱走の経緯やヴェツラーとヴルバの報告文書については，歴史学では（この分野だけではないが）非常に詳しく述べられている。二人の主役は，この問題についての見解を記した自らの記録を公にしている。ここに上梓した学術会議の記録は，ヴルバ＝ヴェツラー記念館（ジリナ）（Vrba-Wetzler Memorial）とスロバキア科学アカデミー歴史研究所（ブラチスラバ）（The Historical Institute of the Slovak Academy of Sciences in Bratislava）が，二人の英雄的行為に想いを馳せるだけでなく，多岐に渡ってその行動を位置づけようとした結果である。このために取り上げたテーマは，反ユダヤ的政策と強制移送を推し進めた者たちがスロバキア・ユダヤ人と一般市民に提供した情報，誤報，虚偽，そして大量殺人の現場からのユダヤ人による初期の，ほとんど文書化されていない脱走，さらにはヴルバとヴェツラーに続いて，アウシュヴィッツからの脱走に成功し，先行する脱走者の情報を補完したアルノシュト（エルネスト）・ロジン（Arnošt（Ernest）Rosin）とチェスワフ・モルドヴィッツ（Czesław Mordowicz）の脱走譚などである。また，同じように重要なテーマとして，この学術会議では，ホロコーストの渦中にあったユダヤ人の抵抗と協力の問題を取り上げた。

2015 年 8 月にヴルバ＝ヴェツラー記念館（ジリナ）の共催を得て開催したこの学術会議の主催者は，会議では前述のテーマに関連する主要問題や論点をすべて網羅することはできなかったと考えているが，本書ではスロバキアから絶滅収容所へとユダヤ人を強制移送した前夜に知られていた情報の複雑さ，収容所の真の姿を伝える情報にたいするユダヤ人による（あったとするならば）受け止め，そして，生成，発展を経て頂点に達したショアの進行を概説したい。

このアンソロジーが読者の目に止まり，本書で取り上げた問題についての議論がさらに活発になされることを願うものである。

編者識す

文献は，一般にも公開されていて，その全文をダウンロードすることができる（https://digital.kenyon.edu/bulmash/771/, accessed on April 20, 2022）。

（3）Bauer, *op. cit.*

（4）*Ibid.*

（5）*Ibid.*

＊　＊　＊　＊　＊

ヤーン・フラビンカ，ハナ・クバートヴァ，フェドル・ブラシュチャーク編
『ショアのベールを剥ぐ ── ユダヤ人の抵抗と大量虐殺情報の世界への通報 ──』
（ジリナ/スロバキア，2015 年）

集録論文と執筆者一覧

ルドルフ・ヴルバとアルフレッド・ヴェツラーのアウシュヴィッツからの脱走とその報告文書の運命 …… イヴァン・カメネツ*
1944 年にアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所からスロバキアに脱走したアルノシュト・ロジンとチェスワフ・モルドヴィッツの歴史 …… エドゥアルド・ニジニャンスキー**
ディオニーズ・レーナルドとレオ（ラディスラフ）・ユンゲル ── ルブリン県からの脱走者とユダヤ人大量殺戮についての世界への通報 ── …… ヤーン・フラビンカ*
（以上，本誌第 70 巻第 2 号，2022 年 9 月）
大統領，スロバキア共和国，1942 年におけるスロバキアからのユダヤ人強制移送 …… マルティナ・フィアモヴァ*
強制移送からユダヤ人を救おうとした「作業部会」…… カタリーナ・メシュコヴァ・フラツカ*
悪魔の手先フリッツ・フィアラ ── 書誌的研究試論 ── …… ミハル・シュヴァルツ*
スロバキア人とユダヤ人の協力と抵抗 …… ハナ・クバートヴァ***
（以上，本誌第 70 巻第 4 号，2023 年 3 月）
スロバキア内務省第 14 局長アントン・ヴァシェックと強制移送にたいするその責任 …… ヴァンダ・ラジカン****
（以上，本誌本号（第 71 巻第 1 号），2023 年 6 月）

*　スロバキア科学アカデミー歴史学研究所
**　コメニウス大学（スロバキア）
***　カレル大学（チェコ）
****　ノースウエスタン大学（アメリカ）